

人と自然をつなぐ

特集

幸せのあり方―北の大地に夢を描いた3人の話―

巻頭言

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 本学の特色を活かした地域に根ざす活動
フィールド・ミュージアム部門 / 発達援助部門 / 暮らしと仕事部門
- 2) 出会いと交流の場をつくるインターフェイス活動
- 3) 地域のニーズに応える地域貢献活動
- 4) 本学の資源を活かした地域交流プロジェクト

幸せのあり方

— 北の大地に夢を描いた3人の話 —

高田 研

「自然／人の繋がり」 を求める若者達

『一人息子』という1936年小津安二郎監督の映画がある。大正末期、信州の田舎で母は学業成績が優秀だった一人息子の立身出世のため、生糸工場で身を削って働き、東京の学校に進学させる。12年後に母は成長した息子に会うため上京するが、息子は都会で夢にやぶれ、定時制の教師をしている。「都会／学歴」に幸せを求めた人間の姿を小津は描き、山村僻地における「学校」という装置の果たしてきた意味、幸せのあり方を現在の私達に問いかける。

前任校である岐阜県立森林文化アカデミーの学生たちを連れ、旧高根村（現高山市）日和田の本集落からまだ数キロ奥にある高原上の「開発」という名の小さな集落に入った。

戦後の引き揚げ者が開発した、名の通りの集落である。昭和20年代、入植者は木を伐採・搬出して製材し、小さな小屋を建て、牛を1頭飼い、ランプを灯してささやかな生活を始めた。

一人暮らしをする70代後半の女性の話は戦前から始まる。諏訪で働いた糸引工女時代。（野麦峠はこの村にある）村に鉛筆工場が出来て、諏訪に行かなくて済んだこと。結婚、そして開拓。現金収入を求めて夫が木曾谷へ柚仕事に行っていたこと。溢れ出る彼女の語りに学生は惹き込まれていく。

林業の学校であった前任校の学生の多くは、山の生活やその自然に憧れてやって来る。一流大学を卒業し、大手企業の生活に終止符を打ち、出直そうという若者も少なくない。

学歴社会にあつては「勝ち組」であつた若者達が村へと回帰する。「自然／人の繋がり」を求めて都市を離れる。彼らにとって、山で生きた人々から学ぶ事は多い。この聴き取りを行った若者たちは卒業後、飛騨・奥美濃・秩父とそれぞれの山で新たな暮らしを始めた。

若者たちに山で仕事の選択肢の一つを提供するのは、現在全国に200以上もある自然学校である。自然学校には「都会／学歴」に背を向けて新しい仕事の領域を「開拓」してきた先輩たちがいる。今回は北海道の大地に夢を賭けた3人を紹介する。

※自然学校とは自然の中で子どもから大人までを対象に、通年の自然体験プログラムを行う施設の総称

『ハローウッズ』 ツインリンクもてぎ

1981年、まだそのような「遊び」で飯を食うことなど誰も思いつかなかった頃、崎野隆一郎（1957年生まれ、鹿児島）は大雪山国立公園、道内では最も標高の高い湖の然別湖畔に移住する。湖に住む古老の生き様と語り惹かれてこの場所を選んだと彼は語る。

彼は湖畔の観光ホテルの宿泊客に対して、然別湖の豊かな自然の体験を提供する仕事を始めた。ナキウサギの生息する東雲湖へのガイドツアーから始まった事業は1990年に有限会社「然別湖ネーチャーセンター」を設立、熱気球、フィッシング、カヌー、ガイドツアー（自然観察）の有料プログラムを行う。有料ガイドの草分けであった。

オフシーズンであった冬の湖上に温泉ジャグジー（水上露天風呂）、アイスバー、星野道夫の氷上ミュージアムなどを出現させ、1994年からは国内初の体験型修学旅行をパッケージ化し、顧客の拡大を図った。

妻子は山麓の鹿追町に住み、野は湖畔にある国設野営場の一角を宿舍として、若いスタッフ達や愛犬と寝食を共にしな



がらの仕事である。

1999年から本田技研工業（株）にその手腕を買われ、新プロジェクトに自然活用アドバイザーとして参画。栃木県にあるサーキット場ツインリンクもてぎ内に『ハローウッズ』という大きな自然学校を開設し、そのプロデューサーとして現在に至っている。「自然学校」という枠組みを常に作り変える人物である。

然別湖ネーチャーセンター <http://www.nabeat.ne.jp/nature/>
ツインリンクもてぎ ハローウッズ <http://www.honda.co.jp/hellowoods/>

伊東俊和

『霧多布湿原センター』NPO法人 霧多布湿原トラスト

霧多布湿原は釧路と根室を結ぶ海岸線の中ほどにある。伊東俊和（1951年生まれ、東京）の山小屋風のおしゃれなデザインの自宅はその湿原からすこし丘を登ったところにある。1階の大きなガラス張りのリビングから10ヘクタールもある庭？である原野が遙か向こうの森へと続いている。ゆっくりとお茶を飲みながらエゾシカの群れが通り過ぎるのを眺める。冬場にはハクチョウ、時にはヒゲマもやって来る。

原野はこの場所で農業を試み、入植し開拓した夫婦の夢の跡である。質素で小さな板張りの開拓家屋と原野を買い取り住み始めたが、冬の寒さのために風邪をこじらせ、医者からはこの家にあなたが住むのは無理だと止められたという。道東開拓の厳しさはこの地に長年生活された老夫婦の苦勞が偲ばれる。

1979年（株）キューピーの社員であった伊東は東京本社から札幌支店に転勤になり、商用で根室市に向かっていた。途中猛吹雪に遭い、浜中町で足止めされてしまう。それが彼と霧多布湿原との出会いであっ

たという。一夜明けた翌朝、眼前に広がる白銀の広大な原野に魅せられた彼は、以後札幌から霧多布へ通うようになる。

しかし湿原はそこに生活を営む人々にとっては保護すべき対象ではなく、開発を阻む湿地・谷地であった。ある時「都会から来る人はみんな自然を残したいと言うが、けっして自分で運動しようとはしない」と言われたことから、3年後の1982年にさっぱりと会社を退職し、浜中町（人口7148人/2007年現在）に夫婦で移住。退職金で湿地の近くの道路際にちいさな喫茶店「てんぼうだい」を開業する。

当時は地域に喫茶店などというものは一軒もない時代であった。シーズンにはかなりの観光客がコーヒーを飲みを訪れ、思惑はヒットする。

この喫茶店が集まってくる湿原が大好きな地元の人々を核にして1983年「霧多布湿原ほれた会」を結成。開発反対運動ではなく、湿原が大好きなファンを増やす運動として、湿原を一人千円の会費で所有者から借りるといふ運動が始まる。彼は企業人のセンスで新しい湿原保護の形をスタートした。

1986年には「霧多布湿原ファンクラブ」と改名。同年、町の21世紀プラン会議において地域全体を博物館と考えるエコミュージアム構想が生まれ、そのコア施設として、1993年に町営の霧多布湿原センターがスタート。伊東はその館長に就任する。

2000年にはNPO法人霧多布湿原トラスト（三膳時子理事長）を設立し、借り上げから民有地を買い取るナショナルトラスト運動へと展開して



きた。個人会員2545人、法人会員141団体。保全地は民有地の約28パーセントの345ヘクタール（2007年4月）に達している。

2005年には霧多布湿原トラストが指定管理者となり、町営だった霧多布湿原センター運営を受託。伊東は町を退職してトラスト事務局長として館の運営に関与。現在は行政の枠では出来なかったエコツアーを始め、地域づくりとその商品開発に奔走している。

長期のインターシップでお世話になり、ここで湿原の保全について学んだ学生は現在飛騨市河合（旧河合村）に入り、県立自然公園「天生湿原」の保全に尽力している。

霧多布湿原センター <http://www.kiritapu.or.jp/center/>

特定非営利活動法人 霧多布湿原トラスト <http://www1.com.ne.jp/wetlands/>

高木晴光

『黒松内ぶなの森自然学校』

「小人になるから暫く目を閉じていて。」ブツブツとなにやら呪文を唱えると、高木晴夫（1954年生まれ、千葉）は森の奥へと入っていった。「もう眼を開けていいよ。」彼はブナ巨木の下で小人のように見えた。

子ども達をこの森に案内したときには必ずやって見せるそうだ。渡島郡黒松内町（人口3313人/2007年現在）には平均樹齢110年、約1000本からなる北限のブナ純林がある。林は国有林で戦中・戦後2度も伐採計画が持ち上がったが、住民の熱意で守られてきた経緯がある。町長の奥さんも出演するブナを守る市民劇があるらしい。

高木は大学を卒業後貿易商社に勤め、外資から建具、家具の輸入の仕事。その後、リゾート施設の企画開発やスポーツクラブの運営をする企業へ。1991年から専門学校を運営する企業に転職し、1992年社内の事業として北海道自然体験学校NEOSを設立。1998年にはNEOS独立。1999年に現在のNPO法人ねおすととなる。

「ねおす」の全体像を理解するのは難しい。3つの自然学校の経営および支援と2つのビクタ自然教育の人材育成、他諸々が、それぞれに自律的に動き、有機的に繋がりがあつて出来ている不思議な組織である。1997年、NEOS独立直前。札幌の居酒屋でビールを飲みながら彼は、画用紙に描いた「銀河」の絵を指して、これだと組織の未来を示した。

高木は札幌から黒松内へ家族で移住。それまで繋がりの深かった黒松内町の(旧)作開小学校を借り受け1999年「黒松内ぶなの森自然学校」を開校する。自然体験やエコツアーに留まらず、小学生の山村留学から、地域のお年寄りのケアまで含めた「交流」と「教育」をテーマにした自然学校を目指している。

「それは、勝組・負組、上流・下流と分けられるようなグローバル経済に翻弄されることなく、自然の中で心豊かになれるコミュニティづくりでもあります」(HPより)。

それはまさに山村僻地の廃校を蘇らせ「自然／人の繋がり」を取り戻すあらたな「学校」という装置づくりである。

NPO法人ねおす <http://www.neos.gr.jp/>

■都留文科大学の卒業生が活躍する自然学校

財団法人キープ協会 <http://www.KEEP.or.jp/FORESTERS/>

トヨタ白川郷自然学校 <http://www.toyota.eco-ins.jp/main.html>

新潟県立浅草山麓エコ・ミュージアム <http://www6.on.ne.jp/e-museum/>

(たかた けん・本学社会学科教員)





過去20余年の間に2000カ所を数えるに至ったという自然学校の設立ブーム。これだけの数の自然学校の担い手が全国にいて、その数百倍、数千倍の参加者がいるという事実は、一つの社会現象として、この国の社会と人々の生活への違和感や不全感を、逆説的にはあれ反映しているはず。そこに託されたものは、いったい何なのでしょう。

自然、環境、共生、そして地域。自然学校をはじめと

して、これらの言葉をキーワードとした取り組みは全国に点在し、さらに点から線へとつながり始めています。それはまた、グローバル化の進展の裏面で、個人の進路と地域社会の進路が、これらのキーワードの局面でつながり始めたということかもしれません。

今回の特集では、こうした取り組みの担い手たちにスポットを当て、彼らの想いと生き様を介して、この現象の一角に踏み込んでみたいと考えました。

よりかからず

地域コーディネーターとしての 自然学校の可能性

ホールアース自然学校 大武圭介

「皆さん、こんにちは。私たちは『ホールアース自然学校』から来ました。いきなりだけどもんなに質問です。自然学校って聞いたことある人いますか？」

スタッフの呼びかけに、一瞬きょとんとした表情をした後、数名の生徒の手が不安げに挙がります。中には全く手が挙がらない学校もあります。

ホールアース自然学校は富士山麓を中心に、子どもたちの教育旅行（大半は修学旅行）における自然教室の実施を25年近くにわたって実施しています。自然教室といっても、プログラムの時間は2泊3日の全行程のうちわずか3時間程度の場合がほ

んどです。そんな短い時間であっても、一生の思い出に残るような自然体験を提供したい、という思いで富士山麓の樹海や洞窟、巨木の森を案内しています。冒頭の質問は、初対面の生徒たちに自己紹介する際の最初の投げかけです。

プログラム後、生徒から感想を書いた手紙をもらうこともしばしばありますが、「修学旅行の一番の思い出です」と書いてあると本当にうれしくなります。また、20年以上続いている中で、中学生の時にプログラムを受けた生徒がスタッフとして今度はプログラムを提供する側になった、ということもあります。

このようにホールアース自然学校



写真右ページ：毎日見ても飽きない富士山。左ページ右：自然学校って知ってる？ 左：年4回の季刊です。

は、教育旅行における自然教室の実施のさがげとして知られるようになりましたが、現在では40名近い常勤スタッフを抱え、富士山麓の他に沖縄、新潟にも分校を持ち、独立自営の民間の自然学校としては国内最大規模と言われています。当然、現在行っている業務はそのイメージ（よく言われるのは、自然の中で子どもキャンプをしている団体ですか、というものです）からは一見かけ離れたものもあります。

例えば、最近増えてきた分野に「企業のCSR活動支援」というものがあります。CSRとは企業の社会的責任と言われ、単に「地球に優しい」というイメージだけでなく、具体的な事業を通じて地域社会や環境に対して貢献することが求められてきています。特に環境貢献の分野では、企業単独では成果が上げにくいというところで、これまでともすれば対立する機会が多かった企業と、ホールアース自然学校のような環境NPOが一緒に手を組み、それぞれの専門分野を活かしながら新たな取り組みを始めています。

現在行っている具体的な活動事例としては、勤労者の金融機関である労金の全国組織「労働金庫連合会」の支援を受けて、富士山を含む全国3地区で地域のNPOを主体として里

山再生と森林環境教育事業を10年間にわたって進める「ろうきん森の学校」があります。従来企業の環境分野での社会貢献活動というと、海外での植林活動などが有名でしたが、ここでは「森づくりから始める人づくり、地域づくり」をモットーに、2005年度から里山の整備と活用（特に森林環境教育プログラム）ができる人材の養成に力を入れて、10年間の事業終了後には地域で自律的な森づくり活動ができることを目指しています。これまで2年間で3地区合わせて延べ11000人以上が森づくりや森遊びの活動に参加しました。

この事業以外にも、企業のCSR支援活動として、社有林を活用したプログラムの企画実施、社員の環境マインドの向上を図る研修会の企画実施など様々あります。興味深いのは、これら企業のCSR活動の多くで「地域」との接点を求めているという点です。これまで地域づくりや活性化事業は行政事業として行われるのが常でしたが、今後は企業も地域社会の一員であるという認識に立ち、積極的に巻き込んでいくことが、経済的な基盤を伴った持続的な地域づくりにつながるのではないのでしょうか。そしてその際重要なのは、どの組織や機関からも独立した、しが

らみのない立場を貫くコーディネーター役が必要だということです。ホールアース自然学校は設立当初から一貫して「NGO非政府組織」という立場を取ることで、様々な相手と協働してきました。

地域において自然や環境への関心が一層高まる一方、問題解決に向けた利害関係は複雑になっています。こうした中、独立したスタンスを取る自然学校の役割は今後ますます大きなものになっていくに違いありません。

最後になりましたが、この春リニューアルした、ホールアース自然学校の活動を伝える通信紙のタイトルに『輪りん』と付けました。これは様々なネットワーク・つながりの輪という意味もありますが、同じ音で「凛」「倫」「隣」なども連想されます。どれもホールアース自然学校のスタンスを表しているようで、いいタイトルだと自画自賛？しています。

※「輪」をご希望の方はホールアース自然学校までご連絡ください。 <http://wens.gr.jp>
（おおたけ けいすけ・ホールアース自然学校 事業部コーディネーター）

“インタープリター” という職業

トヨタ白川郷自然学校 加藤春喜

みなさんは「インタープリター」という言葉をご存知でしょうか？

一般的には「通訳」のことを指す英語ですが、アメリカでは、国立公園などにいる解説員も、自然や歴史から得られる大切なメッセージをわかりやすい言葉や体験に「翻訳」する職業であることから、インタープリターと呼ばれています。それに倣い、私の勤務するトヨタ白川郷自然学校でも、お客様に自然体験などのさまざまな活動を提供する専門スタッフのことをインタープリターと呼んでいます。これが私の今の仕事です。

自分の職業を人に話す時、いつも説明を必要とすることが面倒ですが、そんな言葉を私たちは敢えて使っています。しばしば取材記事などでは「自然解説員」と表現されることもあります。私たちには「自然解説員」という言葉を持つ従来のイメージとは一線を画したいという思いがあります。そしてその矜持は、トヨタ白川郷自然学校がめざす「自然学校」づくりにもつながっています。「大人も楽しめる自然学校」をめざすトヨタ白川郷自然学校は、おいしいフレンチや温泉をたのしめる、泊まれるレストラン「オーベルジュ」でもあります。一般に「自然学校」と聞くと、多くの方は学校の研修などで利用した公設の自然の家を連想

されますが、環境問題が切迫している今日、環境に関心のない人々を「その気にさせる」仕掛けとして、キャンプ場でも自然の家でもなく、リゾートホテルでもない、新たな自然体験の場が必要だと私たちは考えています。

トヨタ白川郷自然学校では、昨年の12月23日〜25日に小学生の子をもつ家族を対象にした2泊3日の宿泊型自然体験プログラムを実施しました。ごく一般の、ちよつとリッチなクリスマスを家族で楽しみたいという方々を対象にしたこのプログラムでは、ご家族で素敵な聖夜をお過ごしただくなく、さりげなく、自然のすばらしさやかけがえのなさを感じていただけるよう工夫を凝らしました。初日の夜に行われた、そのプログラムの一部をご紹介します。

自然学校のフレンチレストランで夕食を終えたご家族がロビーの暖炉の前に集まり、インタープリターによる本の朗読プログラム「ストーリーテリング」が始まりました。家族で食べるクリスマスケーキのイチゴを探すため、森にでかけた小さな女の子が、野ウサギに出会ったことから始まるメルヘンチックな物語が、エレクトーンによるクリスマスソ



《トヨタ白川郷自然学校とは》

トヨタ自動車が生産可能な車社会を実現するため、自動車ユーザーをはじめ、ひろく一般市民の環境意識の啓発を目的に、岐阜県白川村に設置した自然学校です。自動車を生産する企業が将来にわたって活動を続けていくために、より環境にやさしい車をつくらなければならないことは言うまでもありませんが、いくら環境にやさしい車をつくっても、誰も買ってくれなくては経営が成り立ちません。技術革新、法整備とともに、「環境にやさしい」性能への評価を、車を買う判断基準として一般に普及させていく必要があります。わかりやすくいえば、少々、高くても、環境にやさしい車を選ぶ「人づくり」をするための場です。このように、トヨタ白川郷自然学校の活動は公益性が認められるものの、一企業の経営戦略でしかないという厳しい見方もできます。最近では、企業の社会貢献事業ではなく、自動車を生産する企業としての社会的責任（CSR）活動として位置づけられつつあります。

グの生演奏をBGMに語られていきます。主人公の女の子が、野ウサギの家族からイチゴをおすそわけしてもらい、ケーキが完成して、めでたしめでたしとなったところで、突然、ロビーの脇をウサギの耳をつけたスタッフがこれみよがしに通り抜けていきました。物語さながらのウサギの登場に会場は笑いに包まれます。子どもたちをウサギの後について行かせ、ウサギが消えていった部屋に入ると、そこには、なぜか（案の定？）イチゴがあるではありませんか。しかも、バケツ入りで（笑）。思いがけない食後のデザートが登場に子どもたちは大喜び。偶然にも、バケツは参加家族の数だけありましたので、ケンカすることなく、それらのイチゴをロビーで待つ家族のもとに持って帰り、みんなで仲良く頬ばりました。

そんな和んだ雰囲気の中、スティーリーテリングの第二幕がはじまります。今度は生演奏に加え、暖炉の上の白い壁に、冬の白川郷の森の風景がプロジェクターで次々に映し出されていきます。先程とは一転して、物悲しい音楽とともにインタープリターが語る物語は、厳しい冬を生きるキツネの親子の物語でした。壁に映し出される雪に閉ざされた白川郷の風景の数々によって、降

りやまない吹雪の中で空腹に耐えながら生きるキツネの物語が、よりリアルに聞き入る人々の頭のなかに描き出されていきます。

そして、翌朝には、実際に雪上に残されたウサギやキツネの足跡を辿る、雪上ガイドウォークを行いました。

より多くの方々に環境への関心を寄せていただくためには、およそ、自然体験活動からもっとも縁遠いような人にこそ、自然のすばらしさや環境のことを考える大切さを伝える必要があります。私たちは、常に相手の視点にたち、どんな活動なら、どんな言葉なら受け入れてもらえるのかを注意深く検討しながら、お客様に提供する体験プログラムを立案しています。それが、私たち「インタープリター」の仕事です。



（かとう はるき・トヨタ白川郷自然学校・インタープリター）

建築の連鎖が まちを創る

福祉住環境への想い

渡辺 譲

環境に係わる要素は、水、空気、光、熱といった自然が発するものであり、それらが包括された単体が「建築」であり、その集合が「まち」で、「地域」へとつながってゆきます。自然環境抜きでは建築は語れません。建築の連鎖がまちを創ってゆきます。建築に携わっている者は、いつでも、研ぎ澄まされた感性と、現実を直視する気構えがなければ、その責を成し得ないでしょう。

都留文科大学の学生と市民とのつながりによる「つるまちづくりネットワーク」が生まれてから7年が経ちますが、4年前、まちづくりの具現としてのNPO法人を提案し、私の資質を最大限に生かせる、福祉住環境を主体とした「住まいるネットワーク」を立ち上げました。福祉住環境コーディネーター、建築士、大工、環境管理者、民生委員、主婦といった仲間が構成しています。これまで各地で住環境の改修の提案をし、実際に改修工事も行ってきました。私たちのミッションは、そうした提案によって、障害を持った人や高齢の方々に、住み慣れた自分の家で、少しでも快適に過ごしていただくことです。「あんなたちに頼んで良かったよ、ありがとう」の一言で、私たちに次の勇気を与えていただ

ています。

障害者、高齢者を欺いての商法が未だ後を絶ちません。やはり、地元の「顔で」「心で」の対応が重要になっていると思います。

いま、障害者福祉作業所のリノベーションに取り組んでいます。彼らが快適に作業し、生活できる空間創りに四苦八苦している毎日です。ユニバーサルデザインなどと簡単に発信されていますが、現場では大変な事象が山積しています。全ての人たちに良い事と思われていても、ある人にとっては最悪な事だったりもします。最大の難関が（いつもそうですが）、資金不足です。

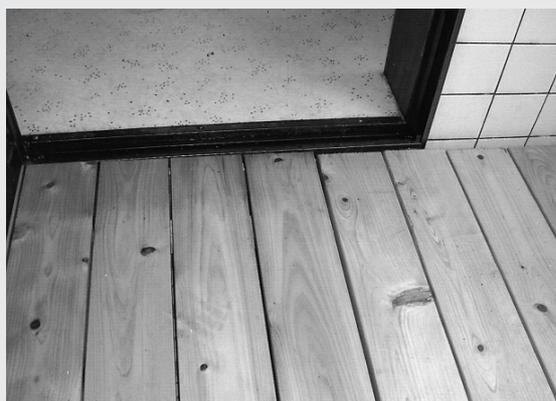
しかし建築は、最良な環境の中で生き生きとし、その役割をまっとうします。常に理想を追い、そこで活動し生活する人々の笑顔のためにこそ、私は自分の力を注ぎ込みたいと思います。

バリアが立ちただかっても妥協ではなく、将来への期待を込めての建築を創ってゆきたい。いまこの時こそ、私が試されているのだと思えてなりません。しっかりと奮ってゆきましよう。

（わたなべ ゆずる・福祉住環境コーディネーター・都留市在住）



浴室の段差。障害を抱えている人にはつらい。



段差解消のスノコ。ちょっとしたアイデアでバリアフリーに。

自然のサイクルを 感じながら

加藤大吾

「地球に優しい」＝「快適」

かとうさんちに一步踏み込めば、「こんなに地球に優しくて人が快適に生活できるんだ」と実感できるくらいにしています。

例えば、太陽光／風力発電機、7Wの電球、キッチンガーデン、ミニズコンポスト、家そのものが夏涼しくて冬暖かいつくりなど、最も特徴的なのはSVO仕様ディーゼル車（ストレートベジタブルオイル車）。

僕の車は使い終わった天ぷら油で走らせているんです。料理店から廃食用油をもらって来て、一斗缶18ℓを濾過器に「ジャー」と流し込むんです。1時間くらい経ったら、濾過終了。薬、水、電気などを使用しないで燃料を作れる。それを給油口から入れればエンジンがかかる。元々ディーゼルエンジンは大豆油を燃料として開発されたものだったので、軽油と変わらずに普通に走ります。しかし、油は低温になると固まってしまうのです。それを克服する為に冷却水とバッテリーを利用して燃料を暖める装置を取り付けています。

この車にして良かったと感じることは燃料代が格安になったことと、環境に影響を与えるCO₂を排出す

るストレスがなくなったことです。信号で止まったときの天ぷらの香りもなかなかのものです。

自然の摂理に沿う豊かさ

かとうさんちには自給のための小さな畑があります。昨年は毎朝、いもむし君を取るのが日課でした。

この冬、野鳥用の餌台を置いてみました。すると、次から次へと鳥が飛んできます。家の中では加藤家が食卓を囲み、外では野鳥たちが餌台に群がる。子どもたちもうれしそうでした。

調べてみると野鳥は毎日、いもむし（重量換算）を2000〜3000匹食べるとのこと、「これは、いもむし取りの日課から解放されるかもしれない！」巣箱を4つかけたところ、2つでシジュウカラの子育てがはじまった。

すると、いもむしが激減したので。だから、今年はいもむしを取ったことがないのです。

こんな僕ですから、ほとんど耕さないし、雑草も取らない。雑草の中に野菜がはえているんです。しかも、良く育つ。この野菜は雑草と競り合わなければ大きくなれないから強くなるわけです。食べてすぐに解りま



す。味が濃い。香りが強い。美味しいんです。

自然のシステムを利用して生活を豊かにしていくことが楽しいですよ。

生態系の中で生かされる暮らし。誰かが「へー そういう生活スタイルもあるんだ」と感じて、生き方・暮らし方の1つの選択肢としていただければ生きてる甲斐があります。どうぞ、遊びに来てください。

「アースコンシャス」では「地球に住んでいることを実感する」をテーマに以下のような活動をしています。

- 1 地球と人にやさしい生活体験
- 2 はつりCafe
- 3 大久保山エコビレッジ計画
- 4 泊まれる森
- 5 環境教育／自然体験指導者派遣

地球と人のかけはし「アースコンシャス」
<http://www.earth-cinfo/earthconscious/>

本頁の絵・写真とも加藤大吾氏
(かとう だいご・アースコンシャス・都留市在住)

第38回つる子どもまつり

”たのしさいっぱい
ゆめいっぱい“

浜田悠次



5月20日(日)、都留文科大学は元気な子どもたちでいっぱいでした。「第38回つる子どもまつり」が行われたからです。子どもまつりは、地域市民と都留文科大学の学生との協同でつくられた企画です。この企画が始まったのは1970年(昭和45年)ですが、それ以来38年間、一度も途絶えることなく続いてきました。そのような長い歴史を踏まえつつ紹介をしたいと思います。

今年の第38回は、「日ごろ交流の少ない人たちとふれあえる場をつくりたい。普段できないことが経験できる場をつくりたい」という意義を掲げて、また「たのしさいっぱいゆめいっぱい」をスローガンに、都留文科大学で行いました。

子どもまつりでは、その意義を最も重視して毎年企画を考えますが、大きく分けて二つの例年行っている企画があります。

一つ目は、午前中の「くに企画」というもので、大学1号館内を全て使い、子どもたちに多くの「くに」(ブース)を好きに回ってもらいます。各「くに」は、大学内の部活・サークル・有志、また都留市内外の市民団体など多くの団体によって行われます。今年は、例年以上の協力があり、16個もの「くに」を出すことが出来ました。

二つ目は、「みんなの広場」という午後に行う企画です。グラウンドで、来てく

れた人全員で遊びます。100人以上の子どもたちがグラウンドを駆け回る光景はなんともいえず、ただ圧巻です。今年は、体をつかったあそびをメインプログラムに据え、赤・緑の2チーム対抗でグラウンドを目一杯つかってあそびました。そして最後にダンスをみんなで踊り、一日の企画は終わりです。

今年は昨年以上の参加があり、また力を入れた大月市から24人の子どもたちが来てくれ、大盛況で無事に終えることが出来ました。(子ども345人、大人164人、計509人)

◇くに企画(都留文科大学と表記のないものは市民団体)

- 1階及び外・バザーのくに・おもちゃのくに(新日本婦人の会)・らっぱのくに(都留文科大吹奏楽部)・わくわくのくに(都留文科大Work-Walk都留)・じょいソランのくに(じょいソラン)・アートのくに(都留文科大図工専攻有志)
- 2階・かげえのくに(都留文科大児童文化研究部)・ことばのくに(都留詩友会)・手話のくに(千羽会)・もったいないのくに(都留文科大ミスサエティ)
- 3階・あそびのくに(都留文科大児童文化研究部)・おはなしのくに(都留文科大児童文化研究部)・モデルのくに(実行委員会内サークル子まつり学級)
- 4階・工作のくに(あすなる職人会)

にんぎょうげきのくに(都留文科大学児童文化研究部)・スライムのくに(都留文科大学つくしの会)

子どもまつりの運営・想い

今年で38回目となった子どもまつりですが、その運営方法も年を経るごとに変遷がありました。今は、つる子どもまつり事務局という学生団体を中心に活動しています。

子どもまつりが行われるのは、毎年5月の第3日曜日です(ご存知でしたか?)。その日に向けて動き出すのが、大体2月下旬から3月上旬です。そこから毎週金曜日にYLO会館などの市内公共機関で実行委員会を開き、提案・検討・承認という段階を何度も繰り返して、運営しています。そこでの事務局の仕事は、司会・書記はもちろん、会議の会場の申請、各諸団体への日時の連絡、レジュメの作成・印刷など多岐に渡っています。その事務面を一举に引き受けているのが、前述のつる子どもまつり事務局という団体です。

ただ、子どもまつり実行委員会は、多くの団体・個人が参加する会議です。その会議を出来る限り意義あるものにするために、多くの実行委員の方による発言・提案が行われるのが特徴です。会議を報告の場にするのではなく、実りある活発

な議論の場とすることを心がけて、日々実行委員会が行われています。

また、子どもまつりが終わった後は、各企画や情宣渉外面、意義などの反省をします。その反省や方向性を来年以降に活かすことで、子どもまつりは廃れることなく続いてきたのだと思います。

さらに、子どもまつりの話し合いがないう時期(7~1月)には、プロの芸術家・劇団を呼んでの芸術鑑賞会(16回)、講演を中心とした都留市民に向けた教育を語る集い(6回)、秋に行う子ども向けの企画のこがねっ子まつり(5回)、市民との交流会などの多くの関連企画を行ってきました。

そのような様々な企画を行ってきた子どもまつりは、よく「子どもまつり運動」という呼び方をします。運動と聞くとアタクロだと思われるかもしれませんが、ただ、私たちは、「子どもたちに地域の中で健やかな成長をとげてほしい」という想いを持ち続けており、その想いに近づき、また達成するために多くの企画を行ってきたのだと思います。

私たちは、子どもが育つのに欠かせない要素に「地域」を挙げています。これからも、「地域」と共に歩み、学び、活動をしていきたいと思っています。

(はまだ ゆうじ・本学初等教育学科3年・つる子どもまつり事務局)



社会学科の新科目 「フィールド体験」 おかげさまで無事終了

泉 桂子

去る7月20日午後、2号館101教室にて社会学科環境・コミュニケーション創造専攻1年生による前期授業「フィールド体験」の総まとめである「報告会」が行われました。この日は今年度から新たに始まった同専攻の1期生（1年生）約70名の他、教員5名、来賓として三町商店街から2名が参加しました。

この「フィールド体験」は同専攻の主要科目のひとつです。大学の足元である都留の町を「街の賑わい創出」（市内三町商店街）、「農山村地域活性化」（同戸沢地区）、「環境教育」（同宝の山ネイチャーセンター）という3つの切り口で自ら歩き、体験します。同科目のねらいは、自らの足や手を使って、地域と関わるための糸口を探し、身近なところから問題意識を育み、今後の勉学や生活を、地域との実践的な関係づくりによって豊かな



ものにすることにあります。

商店街でのインタビューを行った学生からは活性化のための試案として「小回りがきくことは小規模商店の強みだが、負担でもある。この点でのネットワークを」や「季節行事を軸とした小中高との連携を」などのアイデアが示され、これに対し、来賓の三町商店街振興会元事務局長国井武彦さんと都留市商工会経営アドバイザー鈴木浩史さんからは「興味深く、積極的に検討したい」などのコメントをいただきました。

また、環境教育の発表は、自作のネイチャートレイルを展示するとともに、自分たちが自然に触れ、仲間と協働するこ



とでどう変わったのか、映像でその表情を捉えました。

さらに農業や伝統産業の体験をした学生たちは、学生たちによる耕作放棄地活用や、農業を活かした都留市の将来像を提言しました。「農山村地域活性化」を指導いただいた観光振興公社の新船有司さん、都留市農林振興リーダーの清水一夫さんからは、後日、「学生の、大変まじめな取り組みに接して、こちらが励まされた」とのコメントをいただきました。

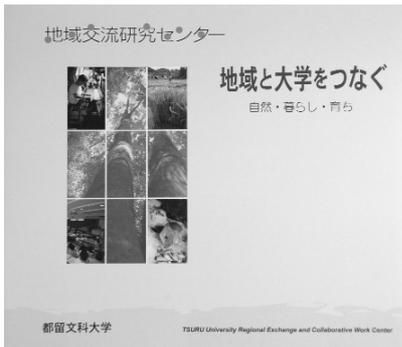
本授業にご協力いただいた地域の方々
に心からお礼を申し上げます。

（いずみ けいこ・本学社会学科教員）



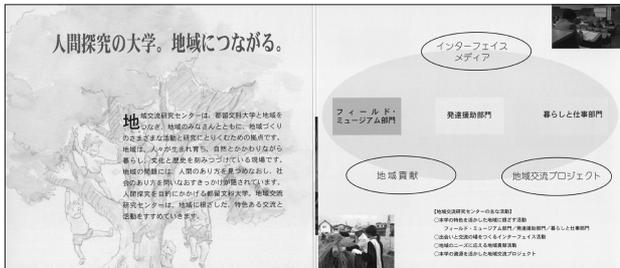
地域交流研究センターのリーフレットができました！

本紙「地域交流センター通信」の発行元、都留文科大「地域交流研究センター」の紹介リーフレット（パンフレット）ができました。センターの活動も5年目を迎え、地域のみなさん、学外のみなさんとさらに幅広くつながり、センターの活動をさらに飛躍させたいと考えてつくりました。



発達援助部門、暮らしと仕事部門）の活動や、インターフェイス、メディアなどのセンター機能を、カラフルなレイアウトと楽しい写真で紹介しています。センターの特色ある活動の一端を、ぜひ一度、お手にとってご覧ください。

リーフレット（無料）がご入用の場合や、センターへのご依頼、ご相談など、お気軽にお問い合わせください。お問い合わせはメール（chiki@tsuru.ac.jp）が便利です。



トピックス3

都留文科大前駅を自然に親しむ入口に

7月26日、都留文科大前駅・ミュージアムは富士急行株式会社と連携し、都留文科大前駅にプラントとメダカの水槽を設置しました。駅を「自然に親しむ入口」にしようという試みで、プラントには、チョウが吸蜜に訪れるヒヤクニチソウやブッドレアを植えてあります。全国的に数が激減しているメダカ（県産）も構内に展示しました。

また駅舎内の待合室には、大学や沿線の自然を紹介するパネルも設置してあり

ます。このパネルは1ヶ月ごとに更新する予定です。

これらのパネルは、博物館学芸員資格コースの授業とも連携して準備してきました。チョウが訪れる花や県産のメダカは、本学の附属図書館ビオトープでも育てています。

今後は、駅を拠点としたエコツアーなどにも取り組んでいきたいと考えています。都留文科大前駅をご利用のさいにはぜひ一度、構内の展示をご覧ください。



トピックス4

編集後記

○畑編集長が今年度の前半、学外研究で不在のため、今号に限って西本が編集を兼担しました。

○前号の編集後記で、今号は今年3月に開催された「第3回地域交流研究フォーラム」を特集する旨を予告していたのですが、同フォーラムのテーマ「地域にとって大学とは何か」とは若干趣旨を違えた編集となりました。

○巻頭言執筆の高田研氏には、前任校時代に同フォーラムの基調講演を依頼した経緯があり、講演中に「自然学校ビッグバン」という表現があったのが強く印象に残っていました。「ビッグバン」と呼ばれるほどの自然学校の設立ブーム。その潮流はどこに発し、どこへ向かおうとしているのか。その一端を浮かび上がらせてみたいという思いが今号の特集に行き着きました。

○そして、一つ明確に見えてきたのは、人と自然、人と人、人と地域をつなぐコーディネーターの役割でした。自然学校の潮流は、じつは社会づくり、地域づくりそのものの潮流でもあるということです。また、そうした現場では、勝ち組／負け組、強者／弱者、そして都会／地域といった二分法を超えた価値観と生活スタイルが追求されているように感じます。そこに新しい社会のあり方、新しい地域のあり方が垣間見えると言え、言い過ぎになるでしょうか。

○今号の特集は、巻頭言と一続きのものとしてお読みいただければと思います。なお、上記の「第3回地域交流研究フォーラム」の詳細な記録も収録した『地域交流研究年報第3号（2006年度）』が7月に発行されました。ご入用の節は当センターまでご一報ください。

○次号は畑編集長が復帰し、当センターの「暮らしと仕事部門」の活動や、社会学科の新専攻「環境・コミュニティ創造専攻」の紹介を中心とした特集を組む予定です。
(センター長・西本勝美)



地域交流センター通信 第12号：2007年10月24日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（西本勝美・泉桂子・今泉吉晴・北垣徳仁）

発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341 (代)

統括編集者：北垣憲仁